

# SHOW HEY シネマルーム

## 50歳の恋愛白書

2009年・アメリカ映画

配給/ギャガ・コミュニケーションズ Power by ヒューマックスシネマ  
98分

2009(平成21)年12月18日鑑賞

GAGA試写室

### Data

監督・脚本：レベッカ・ミラー

製作総指揮：ブラッド・ビット

出演：ロビン・ライト・ペン/アラ

ン・アーキン/マリア・ペロ

/モニカ・ベルッチ/ブレ

ク・ライヴリー/ジュリア

ン・ムーア/キアヌ・リーヴ

ス/ウィノナ・ライダー/ラ

イアン・マクドナルド/ゾー

イ・カザン/マイク・パイン

ダー

## 👁️👁️ みどころ

邦題は官公庁的だが、原題はもっとリアルで、ヒロインの赤裸々な人生の告白！30歳も年上の出版王と結婚したヒロインだが、その若き日のハチャメチャぶりは？80歳の夫と暮らす50歳のヒロインの気持の揺れは？そして、15歳も年下の男となぜ50歳にして惹かれ合ったの？

平々凡々のあなたには別世界かもしれないが、週刊誌の興味は津々。しかし、渡辺淳一の『告白的恋愛論』と対比すれば、より一層興味深いかも・・・。

\* \* \* \* \*

## 男が70歳なら、女は50歳？

本作の邦題は『50歳の恋愛白書』だが、原題は『The Private Lives of Pippa Lee』つまり直訳すれば、本作の主人公ピッパ・リー(ロビン・ライト・ペン)のプライベートな人生(生活の数々)だが、そのココロはピッパの恋愛についての赤裸々な告白。したがって原題は週刊誌の興味(視点)が強い(?)のに対し、邦題はいかにも客観的な官公庁的の報告書風？

日本では今、渡辺淳一の『告白的恋愛論』(角川書店刊)が出版され、2009年12月18日付産経新聞はその書評を載せている。それによると、同書は渡辺淳一自身の恋愛体験をまとめたもので、『恋愛は他人に知られると恥ずかしい部分でもあるし、相手の女性たちに迷惑をかけてはいけない』との思いがあったが、『そろそろ許していただこう』と思いきり、単行本化が実現したとのことだ。『告白的恋愛論』とはいかにも学術的だが、実際は「論じることは決してしていない。あくまでも体験をストレートに書き記した」とのことだから、これこそピッパ・リーと同じような「The Private Lives

of 渡辺淳一」というべきもの。医師でもあり小説家でもある渡辺淳一は既に70歳を超えているが、男が70代でも告白的恋愛論が書けるのなら、女だって50歳で「恋愛白書」くらい書けるのは当たり前？

## こんな「玉の輿」は例外中の例外！

プレスシートによれば、本作は戯曲家アーサー・ミラーの娘で、作家、脚本家、映画監督のレベッカ・ミラーが小説『The Private Lives of Pippa Lee』を書きおろすうちに映画化を決め、脚本をまとめたらしい。レベッカ・ミラーが構想した設定は、母親スーキー・サーキシアン（マリア・ベロ）との確執の中、若い時はドラッグとセックスに溺れていたピッパ（ブレイク・ライヴリー）が30歳も年上の出版王ハーブ・リー（アラン・アーキン）と出会い、ピッパはハーブの大人の男の魅力に惹かれ、ハーブは自分の魅力を魅力と思っていない若いピッパに惹かれていくというもの。もちろんハーブが最初にピッパに惹かれたのは、ピッパの若さと奔放さ。また、ハーブがピッパと出会ったのが、たまたまハーブの妻ジジ・リー（モニカ・ベルッチ）と破局状態になっていた時期だったことがピッパにとってラッキー。自分の夫を若い女に奪われた誇り高い妻ジジが、何とも悲劇的な形で夫をピッパに「譲る」形でピッパはハーブと結婚することになるのだが、こんな「玉の輿」は例外中の例外。たまたまピッパの場合は、結婚してからその生き方を180度転換し、良き妻、良き母になることができたが、その努力は並大抵のものではなかったはずだ。

したがって、本作にみるピッパの「玉の輿」は例外中の例外と心得たうえ、女性は若い時から花嫁修行をした方がベターでは？

## なぜ、ピッパは15歳も年下のニート男に？

本作では、1966年4月生まれだから現在43歳のロビン・ライト・ベンが50歳のピッパ役を演じたのに対し、1964年9月生まれだから今年45歳のキアヌ・リーブスが何と35歳のニート役を演じている。実は、この設定もレベッカ・ミラーの脚本の目玉の1つだ。

キアヌ・リーブス演ずるクリス・ナドーはコンビニの店員をしているようだが、妻に浮気をされて離婚したばかりのダメ男(?)で目下母親の家に居候中。日本では草食系男子が急増しているらしいが、ニートや草食系男子の増殖はアメリカでも同じようだ。30歳も年の離れた大金持ちの男と金目当てではなく愛情をもって結婚して双子を産み、一生懸命妻として母としてつとめてきたピッパが、50歳になった今なぜハーブとの将来に不安を持ち、15歳も年下の男クリスに惹かれていったの？本作はそのほとんどが会話劇で成り立っているが、ピッパとハーブが恋に落ちる時の会話や、ピッパとクリスが互いに惹かれていく時の会話は非常に興味深い。これらはいずれも気の利いたことをしゃべろうと

いう姿勢から生まれたものではなく、自分がホントに感じていることをそのまま表現した  
ものだから、説得力をもっているのだと私は思っている。したがって、そんな会話は婚カ  
ツに悩む20代、30代諸君には少し高度すぎるかもしれないが、大いに参考になるの  
では？



## こりゃやはりアメリカ流！日本ではとても・・・

出版王のハーブがマンハッタンの家を離れ、引退した高齢者ばかりのコミュニティのあるコネチカットに移り住んだのは、何度か心臓発作に襲われたため。そりゃ80歳にもなれば、いくら元気で何らかの病気は出てくるはず。したがって、ピッパはそんなハーブを静かに見守りつつハーブの最期を看取れば、あとは膨大な遺産を相続して一人贅沢三昧の生活を……。若い妻なら普通そんな第2の人生を計算するはずだが、さてピッパは？

ピッパがクリスに惹かれていったのは、高齢者ばかりのコミュニティの中で一人浮いてしまったことが一因だが、他方ハーブの方は？渡辺淳一の例をみれば、男はいくつになっても恋をする動物らしいが、心臓に病をもつハーブがピッパに隠れてピッパの親友サンドラ・ダラス（ウィノナ・ライダー）と浮気をしていたとはビックリ。その現場を発見したピッパはもちろん大ショックだが、弁護士としての私の目にはその後のピッパとハーブの対応にさらにビックリ。こりゃ実にアメリカ的！日本ではとてもこんな対応はムリだろう。

そんなアメリカの対応（？）は、ハーブとの離婚を決心した後、ホントに倒れてしまったハーブとの「別れ」のシーンでも顕著。ピッパは長男のベン（ライアン・マクドナルド）

とは仲良しだが、世界の紛争地帯で写真を撮ることに熱中している長女のグレース（ゾーイ・カザン）とはあまりうまくいっていない様子だった。しかし、いつしかその仲も改善し、ハーブの生命維持装置を外すシーンでは3人が揃ってそれに同意。私の目でみれば、これは安楽死ではないからホントにこんなことができるのかどうかかなり疑問だが、この際それは置いておこう。

さらにアメリカ的なのは、ピッパがハーブの葬儀をベンとグレースに任せ、自分はクリスと共に新たな旅に出ること。また、それをベンとグレースがスンナリ認めること。家の下に停まった車とクリスを見て、ベンは「あの男は？」と疑問を呈したが、今はすっかり母親の女としての気持を理解したグレースは、「お母さんにもバカンスは必要よ」とおおらかにそれを認めたからビックリ。女の50歳は、もう50歳？それともまだ50歳？ピッパのセカンド・チャンスは15歳も年下のクリスと共に始まりそうだが、さてその行方は？もちろん、レベッカ・ミラーの脚本と本作はそれを前向きに描いているが、35年間弁護士としていろいろな人生を見てきた私には、それはかなり疑問・・・。

2009（平成21）年12月19日記

## 上海万博は、大阪万博を超える？

上海万博は5月1日に華々しく開幕したが、怪我人まで出した混乱にもかかわらず入場者数は伸び悩んだ。10月31日までの6カ月の会期中の累計入場者目標は7000万人。それを達成するためには1日平均38万人が必要だが、開会后14日までは入場者は20万人前後と低迷していた。このままではヤバイ！なんとしても1970年の大阪万博の6422万人を超えなければ！そんな風に燃えたのか、上海市当局や万博事務局は住民に無料の入場券を配ったり、学校や職場に団体入場の動員をかけたりと挽回に躍起になっている。

その結果、5月15日にはいきなり33万5300人となり、21日からは連日30万人を超え、29日には50万5000人と開幕以来最高を記録。開幕1

カ月の5月末で800万人の大会に到達したが、それでも目標の約3分の2。

中国は何よりも面子を大切にす国だから、きっと7000万人の目標は達成するだろう。しかし、問題はその実態。31日付の上海紙、新聞早報は3歳以下の幼児向けに会場で貸し出しているベビーカーに小学生とみられる子どもを乗せ優先入館する親が後を立たないと報じた。また、車いすの入場者に3、4人が付き添って優先ゲートに並び、入館後に車いすから障害者が立ち上がって元気に歩き出すケースが多数目撃されているというから、その姿は異常だ。そんな醜い姿は見たくないが、それでも一度は自分の目で中国館、日本館などを見学しなければ。

2010年（平成22）年6月1日記